ISSN 0388-4732

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第 36 巻　第 2 号

下田原峠と地蔵

旧北陸道の倶利伽羅峠や中山道の鳥居峠（長野県）のように全国的に有名な峠がある一方、庶民が利用してきた無名の峠のほうが圧倒的に多いと思われます。旧白峰村（現白山市）には一般の地図に載っていない峠が 10 数か所もありました。現在、そのほとんどの峠は踏み跡さえ分かりにくくなっていますが、下田原峠は現在も少し利用されています。この峠は下田原川と赤谷川の間の標高約 600ｍの稜線にあります。昭和 30 年代の下田原の中学生は、毎日この峠を越えて旧白峰村桑島の中学校に通っていました。また、当時の下田原の人たちは、桑島の役場や食料の買出しなどには、この峠を越えて行き来していました。

峠には小さな地蔵があり、峠を行き来する人の健康や作物の豊作などを祈っているように思われます。

（林　　哲）

深田久弥と白山

高田　宏（深田久弥山の文化館館長）

深田久弥さんは 1903 年のお生まれです。僕は 1932 年生まれです。ということは 29 歳の差があります。丁度、親と子ですね。僕の父親が 1901 年生まれですから、深田久弥さんの 2 つ年上、僕と深田久弥さんとは、お会いしても感覚として、親子の感覚です。大先輩ですがそういう感じでずっと長くお付き合いをいただきました。

深田久弥という名前の呼び方ですが、人名辞典などでは、みんな「ふかだ」と濁っています。今、「ふかたきゅうや」と僕が呼びますのは、パスポートに深田久弥さんがローマ字でサインした時に「ふかた」、DA じゃなく TA、濁らない「た」を使ってらっしゃった。だから、全国的には「ふかだ」ですけれど、せめて地元では、ご本人が自分の事を自称しておられた「ふかた」にしてお話させて頂こうかなと思っています。

その深田久弥という名前を始めて知ったのは小学 5 年生の時です。学校は、ここから 1 分くらいのところにある錦城小学校、最初は、錦城尋常小学校に入って、途中で国民学校と名前が変わり、その国民学校に変わった後、5 年生の時に新しい校歌が出来ました。その作詞者が深田久弥さん。「白山の峰はさやかに」という言葉から始まります。いきなり白山からです。それ以前の校歌というのは全然覚えていませんけれど、「白山の峰はさやかに」で始まるその校歌が僕にとって懐かしき母校の校歌です。その、深田久弥という人が、この町の生まれであることも多分その時に知ったのですが、実物を見たのはもっと後で戦後です。

深田さんは、戦後、軍隊から帰ってこられて、越後湯沢にお住まいになっていた後、故郷の大聖寺町に移住してこられました。実家ではなくて、山の文化館と大聖寺川を隔てた向こう側にある稲坂医院の稲坂謙三というお医者さんの離れに身をよせて、戦後の数年間を住んでおられたわけです。この人物が大人物で、教養豊かで、豪快で、その稲坂謙三医師が深田久弥さんに山を最初に教えた人です。その稲坂謙三さんが大聖寺学生会というものを作っておられました。その学生会の中心におられたのが、稲坂謙三さんと深田久弥さん。そのご縁があったから、その後ずっと色んな形で深田久弥さんとのお付き合いをさせていただいた。学生会に入る前に、あれが深田久弥という人だというのを知ったのは、小学校の前に流れている熊坂川の川べりを二人の大人が大きな声を上げて何か喋りながら歩いていた。それが稲坂謙三と深田久弥でした。浴衣の前をはだけた様な感じで、夢中になってなにか大声になって喋って歩いている。昔のことですから、散歩をするという文化は無かった。歩くというのは、どこか目的地があってそこに行くという事で、何の目的もなくてただ歩く、散歩をする。これは、すごく新しい文化でした。散歩をしながら大声で議論をしている。不思議なお二人を見かけたものです。その、お二人のところの学生会に呼ばれるようになって、なにか大きな台の上に飛び乗った気分でした。

深田久弥生家（加賀市大聖寺）

深田さんが金沢に転居なさって、浅野川沿いのところですが、その頃、僕は京都の大学に行っていました。夏休み、冬休みに帰ってくる毎に金沢の深田さんのお宅を訪ねて、もちろん学生会からのずっとのお付き合いですから、お酒はたっぷり飲ませてもらいました。そして、冬ならば子持ちガニ。ズワイガニに対して、子持ちガニ。深田さんは子持ちガニファンで絶対にこっちの方がうまいと。

深田久弥

僕が大学を卒業する頃、今で言う就職の超氷河期。おそらく戦後今日に至るまで、一番就職難だった年だったと思います。その時に深田久弥さんにある出版社あての推薦状を僕は書いていただいた。大変几帳面な字を書かれるのですが、そういうものだからという事で、巻紙に筆できちんと高田宏君を推薦する旨の社長宛て推薦状を書いてもらいました。それを持って東京に行ったけれど本年度は採用の予定は全くないといわれて、申し訳のないことをしたと思い、お詫びの手紙を出したらそんな事は気にするなという事でした。その後、結局東京のとある出版社に勤めるようになり、そして深田さんは東京の東松原という駅の近くのお宅にお住まいになり、そこへ、ときどき電話を頂いて、田舎から子持ちガニが来たから、飲みにこないかと誘われて、もう大喜びでご馳走になりに行きました。

その後、1964 年になりまして、深田久弥さんが 61 歳、僕が 32 歳。その年になって今度は、深田久弥さんから初めて原稿を頂きました。僕は雑誌の編集をしていました。その雑誌で「探検」の特集をしました。その監修者を 3 人の方にお願いしました。お一人は、深田久弥さん、お一人は、文化人類学者で当時ペルーのアンデスでの調査から帰ってこられたばかりの泉靖一さん。それと、宇宙探検という事で、科学ジャーナリストの岸田純之助さんの 3 人にお願いして、探検特集を作りました。この時、1 月のまだ 3 日か、4 日、新しい年になって間もなくの時ですが、東京駅八重洲口のホテルの 8 畳間か何かを借りまして、その 3 人の方と僕とで企画会議をやりました。ちょうど東京では珍しく、朝から雪が降りしきっている日でした。夕方まで練りに練って、題目、書き手は誰ということでプランが出来上り、岸田さんは、用事があって、お帰りになられたのですが、深田さんと泉さんが「いや、これはすごいものが出来る。こんな嬉しい事はない。もっと飲もう。ここでは、いい加減飲んだから、ちゃんと外に行って飲もう。」ところが 1 月のそんな初めの頃にやっているお店はないです。当時は、だいたいどのお店も暮れから正月はみんな休みでした。そして、泉さんが俺の知っている店を開けさせるといって、神田神保町の「かんとりぃ」と言う店ですが、そこの女将の家に電話を掛けて開けてもらい、われわれ 3 人で出かけていき、ほぼ徹夜状態で飲みました。その途中で泰安を呼ぼう、泰安というのは、加藤泰安、有名な登山家ですね。ヒマラヤのどこか、8,000m 峰の登山隊長なんかをやっておられた、その加藤泰安を夜中に電話を掛けて、おい出て来いということで、泰安さんも泰安さんでそのままやって来ました。だいぶ遠い場所だったと思いますが、1 時間か、そこらしたら姿を現し、それからまた、酒盛りが盛り上がる。深田久弥さんが、これから歌合戦をやろう、つまり短歌をつくって、泉靖一さんと加藤泰安さんが一首ずつ読む。それを、深田久弥さんが、俳句がご専門だったのですが、判定する。泉靖一さんがアンデスの山を読み込んだ短歌を作る。加藤泰安さんがヒマラヤの山を読み込んだ短歌を作る。方や、今度は大興安嶺を読んだ短歌を作る。方や、ゴビ砂漠を読んだ短歌を作る。ということで壮大な地球を駆け巡るような歌合戦。そのたびに、今のは紫泰安の勝ち。つまり紫式部になぞらえて加藤泰安は紫泰安。泉靖一は泉式部。今のは泉式部の勝ち。今のは紫泰安の勝ち。と言ってですね、そらもう、その間ガブガブ飲みながら、夜明け近くまで飲んだものです。その時はさすがに深田久弥さんも、もう 60 を超えていらっしゃるわけですからね、ベロンベロンになって、僕が担いで、ご一緒にタクシーに乗って、お宅に送って行ったものです。奥さんもあきれていましたが。そういうこともあって、よく東松原のお宅へ、洒落たお宅ではないですが、どちらかというと質素なお宅ですが、寄せてもらったりしていました。

そういうことがあり、お付き合いが続いていて 1971 年の 3 月 21 日、僕は八方尾根というスキー場で数日前からスキーを滑っていたのですが、この日スキー場から夕方ふもとの宿に帰ってきたら、宿の人が、「高田さん早く、東京のお宅に直ぐ電話して。」なんだろうと思ったら、今みたいに携帯

電話はありませんから、直ぐ直通で掛かるわけでなくて、待って掛かる。東京の我が家に電話をしたら、深田久弥さんが亡くなられた。茅ヶ岳、山梨県茅ヶ岳の山頂近くの尾根でその日、脳卒中で倒れられてその場で息を引き取られた、という。僕はスキーを放り出してそのまま、夜行電車に飛び乗り東京の深田さんのお宅に駆けつけた。東京に行く列車の中で、一生分の涙を流しました。しかし、涙ってなかなか途切れないものですね。泣いて泣いて泣いてとうとう枯れるかとも思ったけれども東京に着いてもまだ涙が流れていた。その後、親しい友人が亡くなった時にも、父や母が亡くなった時にもたいして泣かなくなりました。あの時全部涙出しちゃった。深田久弥さんのあの死に僕の涙は枯れてしまったと思います。

深田さんからは、よく今度白山に登ろうと、お誘いを受けていたのですが、何故か僕は結局登らずじまい。未だに、一度も登っておりません。一旦は白山自然保護センターの上馬さんのご案内で、二人で別山の途中まで標高 1,600mぐらいまでのブナの森がある辺りですね、その辺まで行っただけですけど、深田さんからは、よく白山一緒に登ろうよ。そして、一緒に白山を滑ろうと言っておられた。今、白山麓にずいぶんスキー場ありますが、当時はありません。つまり、山スキーをやろうってことです。深田さんはいわゆるゲレンデスキーは上手じゃないとご自分でも仰っており、だけど、リュック背負って山滑らしたら絶対転ばないと、それは自信をもって言っておられました。（途中　略）

加賀市大聖寺からの白山遠望

深田久弥と言えば、多くの人に知られるようになったのが「日本百名山」。その中で百の山のことをお書きになっているわけですが、白山の項目、その白山の項目の最初の部分というのは、「日本百名山」の本全体の序文にあたるような文章なのです。ともかく日々に白山を見て育ち、そうして、白山にも何度も登り、だから真に親しい。そして、自慢の山なのですね。白山の書き出しはこうなっています。「日本人はたいていふるさとの山を持っている。山の大小遠近はあっても、ふるさとの守護神のような山を持っている。そしてその山を眺めながら育ち、成人してふるさとを離れても、その山の姿は心に残っている。どんなに世相が変わっても、その山だけは昔のままで、あたたかく帰郷の人を迎えてくれる。私のふるさとの山は白山であった。（途中略）その加賀の平野でも、私のふるさとの町から眺めるのが最上であることを、私は自信をもって誇ることができる。主峰の御前と大汝を均衡のとれた形で眺め得るのみでなく、白山の持つ高さと拡がりを、最も確かに、最も明らかに認め得るのは、私の町の付近からであった。（途中略）夕方、日本海に沈む太陽の余映を受けて、白山が薔薇色に染まるひと時は、美しいものの究極であった。みるみるうちに薄鼠に暮れて行くまでの、しばらくの間の微妙な色彩の推移は、この世のものとは思われなかった。北陸の冬は晴れ間が少ない。たまに一点の雲もなく晴れた夜、大気がピンと響くように凍って、澄み渡った大空に、青い月光を受けて、白銀の白山がまるで水晶細工のように浮きあがっているさまは、何か非現実的な夢幻の国の景色であった。」力はいっていますよね。事実、僕もまた少年時代から見てきた白山はこの通りの白山です。大聖寺から見る白山というのは深田久弥さんが故郷自慢としてお書きになっておりますが、僕もまたこれを、故郷自慢として、深田久弥さんが書いておられるとおりだよと言って、声を大にして言いたいと思っております。深田久弥さんには「故郷の山」っていうエッセイもあります。ある時、お子様連れで、ご長男の森太郎さんを連れて、まだ少年の森太郎さんですね。登って、その時には、あわや遭難、大変な豪雨にあって土石流に目の前も後ろも泥流がはしり、その深田久弥さんと森太郎くんが居た、わずかの場所だけに大きな岩がありました。大きな岩があっ

たので、泥流がそこだけ分かれて前と後ろに流れていき、だから、その岩がなかったら、その場で二人とも土石流に巻き込まれて、とても命はなかっただろうと思います。その経験も書いておられます。あわやというところで命拾いをし、下山して夕方になって金沢に帰ってみると、浅野川沿いの深田さんのお宅は床上三尺の洪水。つまり、床上１m程の水が、浅野川の洪水で、その水がようやく引き始めたところだった。だから、もう、惨憺たる有様ですね。この日の大雨と言うのは、何十年ぶりといった大雨だったようです。そういうことも、この「故郷の山」には書いておられますが、その前半部分は、ずっと「日本百名山」の白山の項目にお書きになった白山賛歌をさらに力を込めてさらに詳細に書いておられて、書く時代がずれても全然書き方はぶれない。常に一貫したままの深田久弥さんがそこに見えています。

県民白山講座「百名山と白山」での講演の様子

僕もまた、「ふるさとの白い山」というちょっと長めのエッセイを書いておりまして。ちょっと一部分言いますと。「その大聖寺町で、私の家の数軒先に深田さんの生家があった。深田さんを見かけるようになったのは、戦後、街に疎開してこられてからだったが、深田久弥という名前はその前からよく知っていた。深田さんは私の小学校の先輩でもある。戦時中私が小学校５年生のとき新しい校歌が作られた。それまでの校歌は歌詞も曲もきれいさっぱり忘れたが、この校歌は今でも口をついで出てくる。白山の峯はさやかに強き子らここに集いて玉とねり鏡とみがくああ錦城、かがやくほこり。錦城小学校の新校歌を作詞したのが、深田久弥だった。校歌を歌うたびに白山への愛着を強めていった。白山の峰はさやかにと歌うと日々に見る白山が一層美しく思えた。深田さんは戦後、故郷の町に新しく出来た学校の校歌も作っておられるが、そのどれにも白山が歌われている。錦城中学校の校歌は春、白山の朝ぼらけに始まり、大聖寺実業高等学校の校歌は、越の白山仰ぎつつで始まる。その土地の山を歌い、歌いこむのは校歌の常ではあるけれども深田さんが白山と書くときには、白山は大聖寺から見るのが最上であるという威信と誇りがあったのだ。白山が見える土地だから白山を入れておこうかといった安直なことではなかった。白山は、深田さんにとって、その山を眺めながら育ち、成人して故郷を離れても、その山の姿は心に残っている山であった。数え切れないくらいの山を歩き、山を語り、山を書いた深田さんの中で、白山は特別な山であった。」

石川啄木の歌「故郷の山に向かひて言ふことなし、故郷の山は、ありがたきかな。」の故郷の山というのは、岩手山ですけれども、深田久弥さんも僕も白山を見てそう思ってきました。その啄木は26歳で世を去ってしまい、残念ですけれど、もしも、長く生きたら、もっともっと山を歌っていたと思います。「一握の砂」にも山を詠んだ歌が数十首あります。多くの人に愛唱されている、やや感傷的なセンチメンタルな歌だけでなく、山を歌いこんだ短歌がずいぶんあります。長生きしたら、山という自然に対する畏敬の心が啄木の中でいろんな文学作品を生み出していっただろうと思います。おそらく遠く時を隔てて、石川啄木と深田久弥が出会ったならば、故郷の山はありがたきかなというところで、遠く彼方の宇宙のどこかで抱き合っているような気もいたします。

この原稿は、平成20年6月29日加賀市大聖寺地区会館で行われた県民白山講座「百名山と白山」（主催：石川県白山自然保護センター・深田久弥山の文化館）での講演から一部を文章化したものです。

中宮展示館出作り野外展示

小川　弘司（白山自然保護センター）

出作り小屋の復元

出作りは、山間地に住居を構え、焼畑でヒエやアワなどを栽培し、養蚕や炭焼きに従事していた生活形態で、白山麓で発達しました。遠く江戸時代からその生活が行われていたと考えられています。自然を巧みに利用したその生活には自然と人とが共生した姿を見ることができました。白山自然保護センター中宮展示館周辺にもこうした出作り生活が昭和30年代まで行われており、その跡地が残っています。そこで、往時の暮らしを振り返り、自然と人との共生について考える場として、この出作り小屋を復元する事にしました。

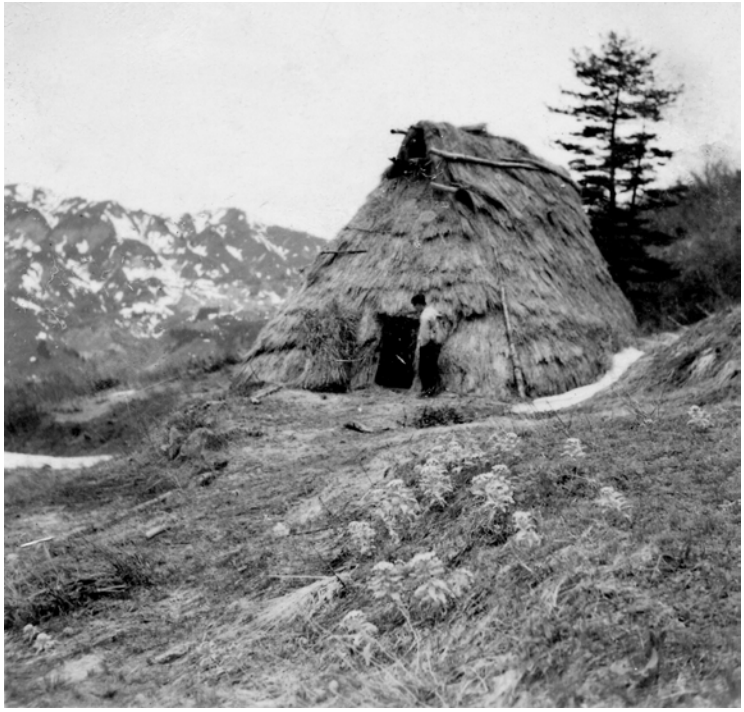
一口に出作り小屋といっても、1年中、山中で生活する永久出作りのような場合には、2階建ての母屋のほか、蚕小屋（カイコを飼育した）などの小屋もある立派なものから、春から秋の間だけ山に入る季節出作りのような場合には、壁のない簡素な根葺き小屋のタイプのものまで、いろいろとありました。

中宮展示館の周辺にあった出作り小屋は、後者のタイプの簡素な小屋で、屋根から葺いた茅がそのまま地面に達する根葺きタイプの小屋で、部屋の仕切りも特にありませんでした。今回、作製する出作り小屋もこのタイプの小屋とすることにしました。

実は、昨年も出作り小屋を作製したのですが、間口 1.5m×奥行 3mの小さなもので今回はもっと大きく、そして頑丈に作ることにしました。それでも大きさは、実際にあったものより小さく、間口が2間（1間は約1.8m）、奥行2間くらいの大きさです。実際の出作り小屋の大きさを、当時を知る方に伺うと、間口が2〜3間に奥行が3〜5間程度であると聞きました。よって今回の出作り小屋の大きさ（面積）は実際のもののおおよそ 1/2〜1/4 程度の大きさになります。

出作り小屋の作製は、中宮集落在住で中宮の出作り小屋を知る中宮展示館の元職員の入口外史さんと現職員である茨木友男さんのお二人が中心となって行いました。

作業は柱や梁の材料となるミズナラなどの雑木や、屋根を葺くための茅集め（茅は昨年から集めたものもあります）を行い、5 月頃から小屋の作製に取り掛かりました。小屋の作製の流れを、写真をもとに紹介します。



中宮にあった出作り小屋（昭和30年代）
写真提供：古谷浩一郎氏

先がＹ字の柱と桁

先がＹの字になった柱を４隅に立てます。柱は穴を掘って、大石も埋めながら固定します。その上に桁・梁を載せ柱に縛ります。柱と桁・梁など木材の結束には本来、「ネソ」と呼ばれるマルバマンサクの若木（弾力性・柔軟性があり、ねじって柔らかくして縄の代わりにする）を使いしましたが今回は針金を使用しました。

ネソ

６本の柱に桁・梁を縛り合掌組で組む

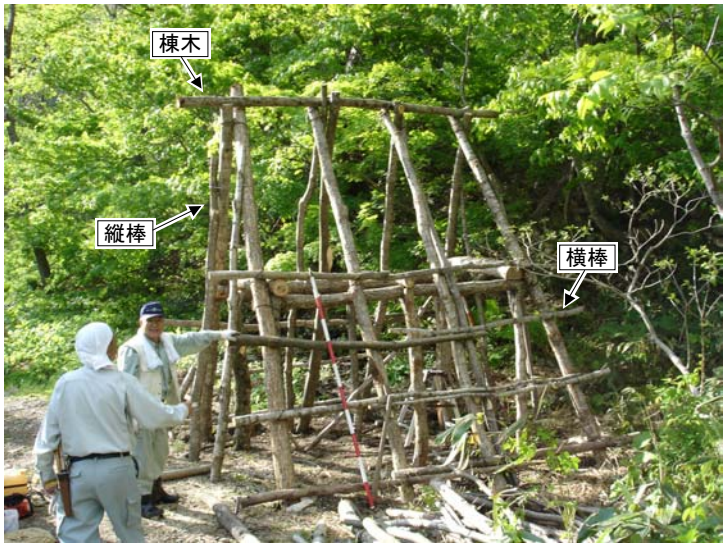
４隅の柱のほかに側面の間にもＹ字型の柱を入れ、都合６本の柱で基礎とします。柱の間には変形を防ぐため仮に筋交いを入れます。

次に屋根の部分を作ります。２本の部材を山形に組み合わせた合掌組で組んでいきます。

合掌組は側面へ４組入れます。そして屋根頂上部に棟木を置き、一旦筋交いは、はずします。

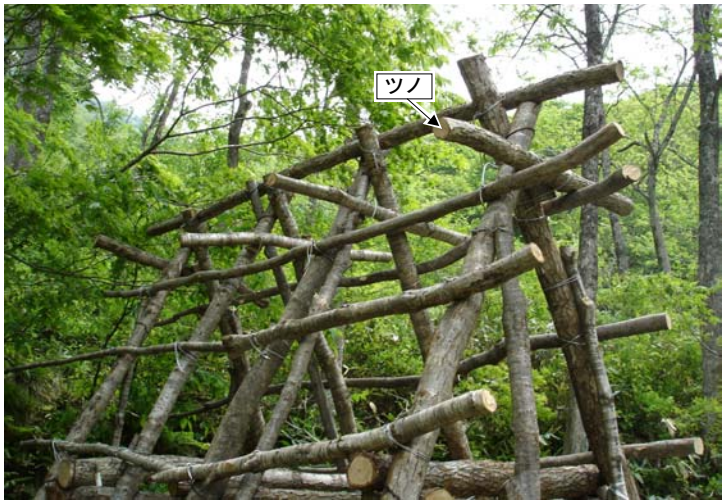
その次は、茅を掛ける横棒を合掌組の部材に組んでいきます。両側面にそれぞれ６本入れます。木は曲がっているので隙間ができたりしますが、その場合にも隙間に木を入れ固定させます。

また、正面（左写真の左側）、裏面に縦棒を入れ、合掌組を補強します。



棟木を置き、横棒、縦棒を入れる

固定する隙間に木を差し込む



ツノを渡す

屋根上部にツノと呼ばれる横棒を合掌組の部材の左右に渡します。ツノは茅を押さえるときに使うものです。

正面上部

骨組みの完成

正面、裏面にも茅を掛けるための横棒を縦棒に渡します。またツノの上にも横棒を追加しました。筋交いも最後に再度入れます。

周囲には溝を掘り、水の侵入を防ぐとともに、掘った土･石は小屋の中に入れ、床を高くします。

これで骨組みの完成です。使用した部材の総延長は茅葺き作業時の横棒も含め、約 195mとなりました。

ボランティアの協力を得ての茅葺き作業

出作り小屋の骨組みや､茅集めは入口さん､茨木さんを中心に当センターの職員で行いましたが、茅葺き作業はボランティアの皆さんの協力を得て実施することにしました。当センターで、自然解説活動をしていただいている「白山自然ガイドボランティア」の皆さんのほか、広く一般のボランティアも募りました。当初の作業は 9 月 6 日、7 日の 2 日間で行うことにしていましたが、中宮展示館へ通じる白山スーパー林道で土砂崩れが起こり、6 日は一般車が通行止めとなってしまい、作業は 9 月 7 日、一日だけで行うことになりました。

集まったボランティアは 13 人、それに協力者の入口さんを含め職員 4 人の計 17 人で作業を行いました。天候の悪化も心配され、作業が無事終了するか心配でしたが、朝の 8 時 30 分から作業を開始し、茅の運搬、茅葺き作業と、昼食休憩もそこそこにボランティアの皆さんには献身的に作業に協力していただきました。途中、茅が足りなくなり、また床に敷くための分も含め、急遽(きょ)、茅を刈り集めるということも行いましたが、幸い雨にも降られることなく作業は順調に進み、予定より時間はオーバーしましたが、夕方の 4 時 30 分頃には作業を無事終了する事ができました。

皆さん、どんな小屋が出来上がったのか、是非一度見に来て下さい。

茅を葺く

葺いた茅が内部に折れ込まないようにコモ掛けをした上に、下から順番に茅を葺いていきます。茅を並べそれを横棒（今回は竹を使用）で押さえ内側の横棒とで縄で縛ります。内側から外側へ縄を通すときには竹棒の先を斜めに切り、穴を開けた「ハリ」という道具を使用しました。

ハリ

最上部の茅葺き

茅を１段２段と、順々に下から葺いていきます。それぞれの側面で４段葺き、最後の５段目を棟木の上にかぶせます。ツノの上に横棒で両側に押さえこみ、縄で縛って固定します。この作業が大変でした。正面、裏正面にも茅を２段葺きにしました。最後に葺いた茅は切りそろえました。

茅を切りそろえる

完成後、協力いただいたボランティアのみなさんと記念撮影

作業終了後、茅葺きした小屋の前で記念撮影をしました。

後日、室内の地面をならし木を敷き詰めその上に茅を敷き並べ、最後にコモを敷きました。内部に小さな囲炉裏もこしらえ室内も完成させました。

内部の様子

登山道の利用形態と施設の維持管理について

村中　克弘（白山自然保護センター）

一部ルートへ利用が集中

白山は、石川・岐阜・福井・富山の4県にまたがる独立峰で、山頂（御前峰）へ通じる登山道は石川・岐阜・福井の3県から合わせて14ものルートがあり、いろいろなルートから白山登山を楽しむことが出来ます。しかしながら、一部のルートを除き距離が長く、時間もかかることから、利用は距離の短いルートに集中する傾向にあります。

環境省が平成15年より主要登山口に設置した登山者カウンターによる登山者数調査によれば、主要登山口10か所からの年間登山者数は、平成15年から19年の5年間の平均で、約5万人（表1）となっています。そのうち別当出合（白山市白峰）から登る砂防新道・観光新道、大白川（岐阜県白川村）から登る平瀬道の3ルートに登山者が集中しており、全体の約80%を占めています。

この3ルートに集中する原因として考えられるのが、他のルートは、距離が長く、「登り」で利用する場合、室堂まで登るには長時間の歩行を余儀なくされ、場合によっては避難小屋での宿泊も必要となること、また白山は各登山口とも電車の駅から遠く、バス等の公共交通機関の便数も少ないことから、マイカーによる登山者が多く、登山口と同じ場所に下山せざるを得ないため、おのずと下山ルートも制限されてしまうといったことが考えられます。北アルプスの一部の地域で行われている自家用車の回送、例えば別当出合から中宮温泉へのタクシー業者等による回送が行われれば、分散化が促進されると思われますが、残念ながら白山ではまだほとんど実施されていないようです。

表1　平成15～19年の主要登山口の登山者数の平均

ルート名	登り		下り		備考
	登山者数	割合	登山者数	割合	
砂防新道	28,900	58	25,353	48	
観光新道	5,161	10	10,050	19	
平瀬道	4,675	9	4,885	9	
3ルートの合計	38,736	77	40,288	76	
別山・市ノ瀬道	1,672	3	2,177	4	
釈迦新道	690	1	1,043	2	
加賀禅定道（一里野スキー場より）	444	1	450	1	H19年の数値
岩間道	3,111	6	3,030	6	H17年の数値
中宮道	398	1	452	1	H15年とH19年の平均
石徹白道（美濃禅定道）	3,065	6	3,493	6	H17～H19年の平均
鳩ヶ湯新道	2,258	5	2,385	4	H15年とH19年の平均
合　　計	50,374	100	53,318	100	

（注）登山者数は登山道途中までの利用を含む。

登山道の一極集中は、オーバーユースによる登山道の侵食の助長、ピーク時における登山道や休憩所等の混雑、登山者と下山者のすれ違い時の長時間の待機等の問題が発生します。一方、登山者の利用が少なくなれば、登山道自体に草が繁茂し、今後の維持管理が困難になります。そのため、利用の分散化が図られることが望まれます。

ルートごとの体力的な負担度と魅力

そこで、ルートごとの体力的な負担度を指数で表してみました（表2）。これは各登山口から室堂もしくは南竜ヶ馬場まで1日で登った場合を想定して、距離・標高差（ルート中の下り標高差を含

表２　ルートごとの体力的な負担度（指数）

No.	ルート名	登山口	登山口の標高（A）	目的地	目的地の標高（B）	登山口と目的地の標高差 (C)=(B)-(A)	距離（水平）(D)	目的地までの下りの標高差の合計(注3)（E）	累　積標高差 (F)=(C)+(E)	指数(注1)	比率(注2)
			m		m	m	Km	m	m		
1	砂防新道	別当出合	1,260	室堂	2,450	1,190	5.5	0	1,190	17,400	1.0
2	観光新道	別当出合	1,260	室堂	2,450	1,190	5.4	17	1,207	17,555	1.0
3	平瀬道	大白川	1,260	室堂	2,450	1,190	6.7	0	1,190	18,600	1.1
4	白山禅定道	市ノ瀬	830	室堂	2,450	1,620	9.7	58	1,678	26,770	1.5
5	別山･市ノ瀬道（チブリ尾根）	市ノ瀬	830	南竜ヶ馬場	2,070	1,240	13.0	513	1,753	33,095	1.9
6	鳩ヶ湯新道	上小池	930	南竜ヶ馬場	2,070	1,140	12.7	683	1,823	34,345	2.0
7	楽々新道	新岩間温泉	795	室堂	2,450	1,655	14.1	248	1,903	34,370	2.0
8	岩間道	新岩間温泉	795	室堂	2,450	1,655	14.1	283	1,938	34,895	2.0
9	釈迦新道	市ノ瀬	830	室堂	2,450	1,620	14.8	391	2,011	36,865	2.1
10	石徹白道（美濃禅定道）	石徹白	952	南竜ヶ馬場	2,070	1,118	15.2	873	1,991	39,475	2.3
11	加賀禅定道（一里野）	一里野スキー場山頂	1,030	室堂	2,450	1,420	16.2	623	2,043	39,745	2.3
12	加賀禅定道（ハライ谷）	ハライ谷	662	室堂	2,450	1,788	16.2	573	2,361	42,675	2.5
13	北縦走路	三方岩岳駐車場	1,450	室堂	2,450	1,000	20.6	1,182	2,182	48,330	2.8
14	中宮道	中宮温泉	662	室堂	2,450	1,788	19.1	758	2,546	48,350	2.8

（注）１　指数＝(D)×1,000＋(E)×5＋(F)×10
２　比率は各ルートの指数を砂防新道の指数(17,400)で除した値。
３　登山口から目的地までにアップダウンによる下りがあった場合、下り部分の標高差を合計したもので、1/5000測量図面等で計測した。
４　目的地は別山市ノ瀬道、石徹白道、鳩ヶ湯新道は南竜ヶ馬場、その他は室堂とした。
５　距離（水平）は図上測定のため、現地の標識と異なる。
６　累積標高差は、目的地に到達するまでに登らなければならない標高差。

む）を基準に算出したもので、標高差については、登りは1mにつき10倍、下りは5倍して距離に加算したものです。10倍、5倍という数字は、明確な基準があるわけではないですが、これまで私が山に登る場合に体力的な負担を推定する目安として使用してきた数字です。

表２の「指数」の欄を見れば、前述の３ルートの指数は他のルートより小さく、体力的な負担度が小さいことが分かります。一方、体力的な負担度が大きいのは中宮道や北縦走路で、砂防新道の2.8倍あります。白山禅定道、別山市ノ瀬道、楽々新道は砂防新道の1.5倍から２倍程度で、比較的手頃であることが分かります。前述の３ルート以外のルートにも、それぞれ大きな魅力があることから、この表を参考に、自信のある人は中宮道などのルートを、そうでない人も白山禅定道や別山・市ノ瀬道（チブリ尾根）など、いろいろなルートから白山を楽しんで頂ければ幸いです。

白山の山頂へ通じる主な登山ルートの魅力

別山・市ノ瀬道　標高 950mから 1,700m付近までのブナ、トチノキ、ミズナラ等の原生林は白山でも有数である。また別山から油坂の頭までは、東に北アルプスを眺めながら、お花畑の稜線歩きが楽しめる。

釈迦新道　標高 1,150mから 1,700m付近までのブナ原生林が素晴らしい。山頂からの眺望が素晴らしい釈迦岳前峰までの往復ならば、手頃な日帰りコースである。

白山禅定道　旧越前禅定道をたどる登山道で、平成11年に復元された歴史の道。慶松平上の別当坂分岐で観光新道と合流する。市ノ瀬から別当坂分岐で別当出合へ下るコースは手頃な日帰りコースである。

加賀禅定道　美女坂の頭から油池間は、湿原やお花畑が広がっており、また北アルプスや広大な清浄ヶ原の眺望が楽しめ、白山でも最も素晴らしい場所の一つである。美女坂の頭より少し登ると、百四丈の滝を見下ろすことが出来る展望台もある。

楽々新道　アップダウンの多い北部登山道にあって、七倉山から大汝峰鞍部への下り以外は、アップダウンがなく、比較的登りやすいルートである。池塘のある小桜平や東に北アルプスを眺めながら静かな山行が楽しめる。

中宮道　白山の登山道の中では、北縦走路に次いで 2 番目に距離が長く、登山口から室堂へ登る間に標高差 760mの下りがあり、白山で最もハードなコース。白山を代表するブナ原生林や北弥陀ヶ原、お花松原などのお花畑がある。

楽々新道上部から七倉山、大汝峰を望む

中宮道お花松原付近から大汝峰を望む

加賀禅定道百四丈滝展望台付近の木道

登山施設の維持管理

白山国立公園区域で、石川県内にある登山道の草刈り、山小屋等の管理・運営・修繕等の維持管理については、石川県が（財）白山観光協会や環白山保護利用管理協会など 5 団体に管理を委託しています。登山道については、前述したとおり、いくつものルートがあり、石川県が管理している登山道だけでも延べ 100km 近くあります。草刈りについては、毎年実施しなければ場所によってはわずか 1 年で草が繁茂し、歩けなくなってしまいます。特に白山で多く見られるチシマザサは、数年も放置しておけば登山道自体にもササが広がり、廃道状態にもなりかねません。登山道の草刈り作業は、草刈機はもちろん、場所によっては寝具等も担ぎ上げなければならないことから、現地に到達するだけでも大変な労力を要します。また作業自体も急傾斜で足場の悪い所が多く、平地とは比べものにならない程、作業効率は悪くなります。当然それ相応の経費が必要となりますが、近年、これらの経費や山小屋等の修繕に必要な予算の確保が困難になる中で、現在と同じレベルで登山道を維持していくことは、年々厳しくなることが予想されます。そのため、これからはボランティアなどによる登山道整備が益々重要になってくると考えられます。また、山小屋についても昭和 40 年代に建てられたものが多く、老朽化が進み、一部の山小屋では修繕が追いつかなくなっているのが現状です。

自己負担と自己責任

そのような状況で、新しい管理のあり方として、平成 18 年から 2 か所のトイレでチップ制を導入しました。この制度は、強制ではありませんが、利用者から 100 円程度の維持管理のための経費の一部を協力金として出してもらうもので、トイレの清掃やトイレットペーパーの購入等の一部に充当しています。平成 19 年は、利用者の方から 5 か所のトイレで 34 万円の協力金を出してもらいました。平成 20 年は、新たに甚之助避難小屋でも導入し、あわせて 6 か所で実施しています。このような登山道をはじめとした登山施設の維持管理に、受益者の負担を求めていくことは全国的な傾向になっており、利用者の方にはご理解とご協力をお願いしていくことになるかと思います。

最後になりますが、今年、白山では五葉坂での死亡事故をはじめ、多くの事故が発生しています。登山はあくまでも自己責任が原則です。自然の中では何が起こるか分かりません。登山中の遭難や事故は体力に余裕がなくなり、注意力が散漫になったときや、状況の急変・アクシデントにより気持ちが動揺したときに多く発生します。登山前の体調管理はもちろんですが、普段から体力を鍛えることなどで、余裕を持って登山できれば、今まで以上に安全で楽しい登山が出来るのではないでしょうか。

白山地域の野鳥観察２　野鳥の知恵

関　幸良（白山自然保護センター）

動物が持っている知恵には、大別すれば、命が誕生した時から本能として持っているものと、生息環境等から学習したものとがあると考えられます。今回は白山地域で観察した鳥達のいくつかの知恵をご紹介します。

エサを運ぶカワガラス

カワガラス　カワガラスは雪の降る 2 月下旬には繁殖行動を始めます。水生昆虫や小魚を主食としていることから泳いだり、水底を歩くのは得意ですが、木の枝に止まることはできません。したがって一番危険な地上で巣作りをします。天敵のイタチやキツネ等の哺乳動物やヘビ等から身を護り、命を継ぐために次のような知恵を使っています。１つめは一番身近なヘビの冬眠中の時期を選んでいることです。 2 つめには主に滝の裏側にある穴や岩棚を利用することがあげられます。巣の周囲には水のカーテンがあり、天敵に察知されやすいヒナの鳴き声、におい、そしてヘビ特有の温度感知機能をカモフラージュしています。しかし、この時期と営巣環境には不都合なこともあるのです。それは気温や水温も低い状況の下で抱卵に適した温度を保つことです。そこで働かせた 3 つめの知恵は巣材選びにあります。身近にあり、湿気に強いコケ類を利用してその不十分な温度を補っていると思われます。

ツミ　近年、目にすることがなくなった「魚屋さん」が天秤棒を担いで売りに歩いていた時、ザルに入れた魚の上に載せていたのは、スギやヒノキの生葉でした。ツミなどはこの生葉の香りに防虫効果があることを知っているようです。ヒナの糞で巣の周辺が汚れると、厄介な害虫が群がります。この厄介者が寄り付かないようにスギなどの葉を巣の周りに置き、防虫しながら子育てをしていると思われます。

ササゴイ　ササゴイは近くにある木片等をクチバシでくわえ、魚がいそうな水面へ投げ、餌と間違えて集まる魚を捕食することが知られています。全ての個体ではないと思われますが、白山地域で唯一、道具を使う鳥です。

その他、天敵に気づかれないように、ヒナの糞を巣から持ち去るヒタキ類、外敵からヒナを守るため、外敵が近づいた時、傷ついたふりをして外敵の注意をひく擬傷行動を行うチドリ類など様々な知恵を働かせています。

珍鳥や多くの種を観察するのも楽しいものですが、一種をじっくり見るのも面白いものです。

巣の周辺にスギの生葉を置くツミ

木片をくわえて川面へ投げているササゴイ

中宮展示館のキャラクター・イヌワシくん

白山麓里山・奥山
ワーキング

登山道の美化に汗

白山中宮道
ブナ林観察と草刈り

白山麓里山・奥山ワーキング「白山中宮道ブナ林観察と草刈り」は7月12日、白山市中宮から白山を結ぶ中宮道で25名が参加して行われました。

昨年は台風で中止となったため、草刈り作業は事実上初めての企画。参加者はカマを手に草刈りに汗を流した後、中宮道の美しいブナ林を観察しました。例年、ススキなどが繁茂して登山道を覆い隠し、登山者を悩ませる場所ですが、作業後はすっきりした登山道に戻りました。

ブナ林の観察も

草を刈り終え、すっきりした登山道を行く参加者

貝の化石見つけた！

白山まるごと
体験教室

化石で探る
太古の白山

ハンマーで石を割り化石を探す親子

河原の石を調べる参加者

白山まるごと体験教室「化石で探る太古の白山」は7月27日、白山市木滑の白山自然保護センターと同市瀬戸の尾添川の河原で家族連れら33名が参加して行われました。

参加者は同センターでオリエンテーションの後、尾添川へ移動し、河原の石を観察したり、岩石をハンマーで割って貝の化石を見つけたりしました。また川遊びも行い、親子で白山の自然と歴史に親しみました。

白山自然ガイド
ボランティア

伝え方を学ぶ

第2回研修講座

白山自然ガイドボランティアの今年度第2回目の研修講座が7月5日、白山市中宮の中宮展示館で18名が参加して開かれ、岐阜県立森林文化アカデミーの小林毅氏を講師に自然解説活動の講義と実習が行われました。

実習では自然観察路を歩き、素材を見つけて狙いを決め、それを伝える工夫に取り組みました。小林氏は「何を伝えるかが大切」「勉強になった、ではなく、楽しかったと言われる解説活動にしてほしい」と話していました。

小林講師（右端）の指導で実習に取り組む参加者

白山のシンボルマーク

里山の１年 すごろくに

床に敷かれたすごろくで里山の１年をたどる親子

県環境フェア

「いしかわ環境フェア 2008」（主催：いしかわ環境パートナーシップ県民会議）が８月 23、24 の両日、金沢市の県産業展示館３号館で開かれました。会場には環境保全活動を行っている団体、企業、大学など 67 の団体が、それぞれの活動を紹介するコーナーや各種体験コーナーなどを設け、家族連れなど多くの参加者でにぎわいました。

白山自然保護センターでも SATOYAMA（里山）コーナーに出展し、平成 17～18 年度に実施した「里地里山における生態系モニタリング調査（白山麓地域）」の調査結果をパネルで紹介したほか、ニホンカモシカ、キツネ、タヌキ、ニホンザルなど野生動物のはく製の展示などを行いました。特に子供たちは普段、なかなか接することの出来ない動物に触れ、感激していました。また、子供たちには、今回作成した「里山の１年すごろく」が好評で、サイコロを振っては楽しんでいました。

県民エコライフ大作戦　参加型の展示も

地球温暖化の防止を目指す県民エコライフ大作戦のオープニングイベントは７月 19 日から 21 日まで石川県庁 19 階で開かれ、白山自然保護センターでは白山での取り組みをパネルや標本、出版物のほか、初の試みである参加型の展示などで紹介しました。

参加型展示はパネル上に「温暖化は防ぎようがないので、影響が出てもしかたがないとあきらめる」、「白山の高山植物や高山にすむ動物をまもるために温暖化を防止する努力をする」の２つの枠を設け、来場者にそれぞれの意見を紙に書いて枠内に貼ってもらいました。

白山自然保護センターの取り組みを紹介するコーナー

県民白山講座

百名山と白山

白山の魅力語る

県民白山講座「百名山と白山」は６月 29 日、加賀市大聖寺の同市大聖寺地区会館で 151 名が参加して開かれました。

作家で深田久弥山の文化館館長の高田宏氏が「深田久弥と白山」と題して深田氏について語ったほか、写真家の木村芳文氏が自然風景、白山自然保護センターの東野外志男が高山の自然をテーマに、それぞれ白山の魅力を紹介しました。

お知らせ

白山麓里山･奥山ワーキング

白山麓カキもぎ隊
日時：11 月１日(土)
13:00～16:00
集合場所：白山自然保護センター本庁舎（白山市木滑）
定員：50 名
内容：カキをもぐ作業を行い、サル・クマなどの獣害対策に役立てます。

白山まるごと体験教室

トチノキ観察とトチモチ作り
日時：10 月５日（日）9:00～15:00
集合場所：市ノ瀬ビジターセンター（白山市白峰）
定員：30 名
内容：トチノキ観察とトチノキの実をトチモチとして食べるまでの苦労を少しだけ体験。

イヌワシを探そう
日時：11 月 22 日（土）10:00～15:00
集合場所：ブナオ山観察舎(白山市一里野)
定員：30 名
内容：双眼鏡や望遠鏡を使ってイヌワシを探します。

申し込み・問合せ　白山まるごと体験教室と白山麓里山・奥山ワーキングは当センター（076-255-5321）まで電話でお申し込み下さい。定員に達し次第締め切ります。

＜編集・谷野一道＞

センターの動き（6 月 21 日～9 月 19 日）

6.23　白山国立公園外来種対策事業検討会（白山国立公園センター）
　　山岳遭難対策協議会（白山市鳥越）
6.29　県民白山講座「百名山と白山」（加賀市）
　　石川の自然セミナー　講師（金沢市）
7.1　白山夏山開山祭
7.2　福井県･石川県共同調査研究事業打合せ（本庁舎）
7.3　白山市高山植物事業打合せ（白山市白峰）
7.5　白山自然ガイドボランティア研修講座第 2 回（中宮展示館）
7.6　外来植物除去ボランティア研修会（県民エコステーション）
7.8　金城大学短期大学部美術学科　講師（白山市）
7.11　立山町議会　視察（本庁舎ほか）
　　ミチノクフクジュソウ保全作業（福井県小原）
　　白山国立公園計画打合せ（中宮展示館）
7.12　白山麓里山・奥山ワーキング「白山中宮道ブナ林観察と草刈り」（中宮展示館）
7.13　あなたもブナを育てましょう　講師（中宮展示館）
7.19～21 県民エコライフ大作戦オープニングイベント（県庁 19 階）
7.23～24 福井･石川合同調査（三ノ峰調査）（福井県三ノ峰）
7.24　白山山頂遺跡群調査委員会（白山市）
7.27　白山まるごと体験教室「化石で探る太古の白山」（本庁舎ほか）
7.28　特定鳥獣保護管理計画（イノシシ）策定ワーキンググループ会議（県庁）
7.31　堅果調査担当者情報交換会（本庁舎）
8.22　石川県特定鳥獣保護管理計画（イノシシ）検討会（県庁）
8.23　県民白山講座「白山の高山にすむ動物たち」（金沢市）
8.23～24 いしかわ環境フェア 2008（金沢市）
8.24　クマ餌資源調査現地研修会（金沢市）
8.27　インターンシップ受入れ（本庁舎ほか）
8.28　立山ルート緑化委員会 視察（白山スーパー林道）
9.7　中宮展示館出作り小屋茅葺作業（中宮展示館）
9.13～15 白山外来植物除去作業（室堂・南竜ヶ馬場）

編集後記

新設された白山山頂の方位盤

白山自然保護センターでは、国立環境研究所と共同で実施している温暖化影響モニタリング調査の一環として白山山頂の積雪期間などを調べるために、山頂に温度センサーを設置しています。その温度センサーが故障してしまいました。その故障した時間は平成 19 年 5 月 19 日 11 時 16 分ごろで、故障の原因としては雷の影響が考えられました。この時刻には気象庁のレーダー観測でも白山山頂付近に強い雨雲がかかっていたこと、落雷位置については数 km 程度の誤差がある場合もあるそうですが、北陸電力の観測でも同日 11 時頃に白山山頂付近に落雷を検出しています。

この時かどうか、定かではないのですが、白山の最高峰御前峰の頂上部に設置されていた方位盤が壊れてしまいました。壊れた原因は温度センサー同様に落雷によると考えられており、もしかすると、その落雷の時間、つまり方位盤が壊れた日時が特定できているのかもしれません。

壊れてしまった方位盤は、寄付により再び白山の最高峰御前峰の頂上部に設置され、平成 20 年 7 月 1 日に披露されました。新しく作られた方位盤、これから多くの登山者に役立っていくことと思います。

（野上）

目　次

表紙　下田原峠と地蔵 …… 林　哲 … 1
深田久弥と白山 …… 高田　宏 … 2
登山道の利用形態と施設の維持管理について …… 村中　克弘 … 6
中宮展示館出作り野外展示 …… 小川　弘司 … 9
白山地域の野鳥観察２　野鳥の知恵 …… 関　良幸 …13
はくさん　山のまなび舎だより …… 谷野　一道 …14

はくさん　第 36 巻　第 2 号（通巻 148 号）

発 行 日　2008 年 9 月 19 日（年 4 回発行）
編集発行　石川県白山自然保護センター
〒920-2326　石川県白山市木滑ヌ 4
TEL. 076-255-5321　FAX. 076-255-5323
URL　http://www.pref.ishikawa.jp/hakusan/
E-mail　hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印 刷 所　前田印刷株式会社